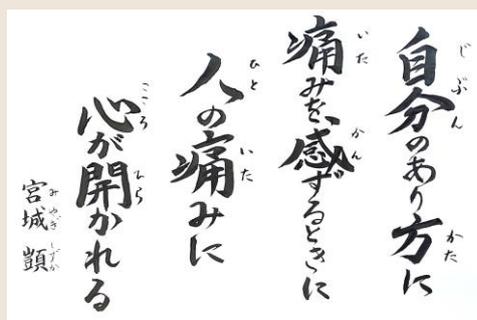


今月のことば



この言葉は逆に言うと、自分のあり方に痛みや不安や悲しみを感ぜないときは、人の痛みに関心を持てない、そのことを聴いたり、心を向けることが難しいということ。私のあり方が揺さぶられるようなとき、人と出会う心が開かれるのかもしれない。

十月 同朋会
十月十日 第二土曜
 時間 午後一時から三時
 場所 徳泉寺本堂
 持ち物 念珠・勤行本
 無料（茶話会は行いません）
 どなたでも参加できます。

『徳泉寺報』編集後記
 ホームページを立ち上げお問い合わせなども手軽にメールでいただくようになりました。スマートフォンを手に「ここにお寺が来たようで心強いわ」とおっしゃっていただいたときはとても嬉しく感じました。いつも皆様の身近にありたいと思っています。

境内の花々



彼岸花

九月同朋会より

前住職法話一部抜粋 「本尊」について

宮城頭(みやぎかしら)先生(元九州大谷短期大学学長)は「自分の人生をどのように生き抜いていくかという態度決定を、つまり自分の人生を生きてゆくときの姿勢をその根本のところ決定していくのが本尊」だとおっしゃいました。私たちは「本尊」として自分の願いを叶えてもらう礼拝の対象のように考えがちですが、真宗では本尊とは「根本」として尊崇するもの。究極的に(生活の)根底とするもの」として自分の人生の中心にあるものと捉えます。

阿弥陀如来は私たちに願いをかけてくださっています。その願いが私まで届くということが大事なのです。「生まれてきた生を生き切ってください。私たちの心の奥底にある、生き切つて生きたいと願う命の願いに気づいてください。」という願い、人間として生きていく方向をしっかりと指し示してください。その阿弥陀如来の願いに気づき、そのことを人生の中心において生きるとき阿弥陀如来は私の本尊となるのです。

住職法話一部抜粋 「感染症の三つの顔について」

日本赤十字社のホームページに「感染症の三つの顔を知ろう」という記述があります。その三つとは「病気」と「不安」と「差別」です。私たちは今コロナウイルスという「病気」だけでなく「不安」と「差別」という感染症にも注意しなければいけません。

特に二番目の感染症「不安」が「嫌悪・偏見・差別」という三番目の感染症を生み、負のスパイラルが起つて感染症が広がります。この「不安」と向き合うにはどうしたらいいか、「気づく力」「聴く力」「自分を支える力」が大切だと日赤のホームページでは続きます。

それはつまり、人と対話することやそこから自分を見つめるということではないでしょうか。実際に人と会えるのがいいのですが、電話で話したり、あるいはお内仏(お仏壇)の前で亡き人と対話することや今の自分に目を向けることによつて「私の姿に気づく」、「自分の本当の声を聴く」、「安心して自分でいられる」。そのことを通して不安と向き合えるのだと思います。

私たちの目はもともと、外ばかり見るようになっています。しかし本当は、どんな事実も受け止め、命に関して真剣に向き合う力を私たちは持っているはずで、その事実から生き生きするということを聞き開いてほしい、そう内に向かつて願われているのです。